

## ディスコグラフィー掲載

### ディスコグラフィー【2020No.164】(HP 掲載)

分類：LP

作曲家：Heddy West 他

曲：500 マイル他

演奏：井筒香奈江 (Vocal) 他

発売：JellyfishLB

No. : LBLP051

概要：



「Direct Cutting at King Sekiguchidai Studio / ダイレクトカットティング・アット・関口台スタジオ」という名称で企画された LP で、ネット上で得られた情報は以下のとおりです。

「ボーカルフエンのミューズ、井筒香奈江の最新作がダイレクトカットティング盤で登場! キング関口台スタジオが誇る国内唯一・21 世紀初のダイレクトカットティング時のまにまにシリーズでオーディオフィン、ボーカルフエンのミューズとなった井筒香奈江の最新作はその独自の世界観が鮮明に刻まれた究極のアナログ録音であるダイレクトカットティング盤で登場!

キング関口台スタジオがこの秋から稼働し国内唯一、世界でもイギリスのアビーロードでしか出来ないという『ダイレクトカットティング』によるレコード盤。その 40 年ぶりの記念すべき第一作目に、シンガー井筒香奈江と前作「Laidback2018」でエンジ

ニアを務めた高田英男氏が組んだオーディオファン、ボーカルファン垂涎のコレクターズ・アイテムが登場!」

## 【PERSONNEL】

Vocal 井筒 香奈江 Kanae Izutsu

Piano 藤澤 由二 Yuji Fujisawa

Vibraphone 大久保 貴之 Takayuki Okubo (A-1, B-2)

Electric Bass 小川 浩史 Hiroshi Ogawa (B-1)

Contrabass 磯部 英貴 Hideki Isobe (B-2)

Recording Engineer & Sound produced 高田 英男(MIXER'S LAB)

Cutting Engineer 上田 佳子((株)キング関口台スタジオ)

Assistant Engineer 高橋 友一((株)キング関口台スタジオ)

Technical Engineer 高橋 邦明 ((株)キング関口台スタジオ)

Recording Studio キング関口台スタジオ 第1スタジオ(2019.9.17&10.10)

Photography 渡邊 久美(K.O.G.PHOTO)

Design 凌 俊太郎

Produced 井筒 香奈江(JellyfishLB)

### 【A面】

1.Love Theme from Spartacus(スパルタカス 愛のテーマ)

2.Superstar

### 【B面】

1.カナリア

2.500 マイル

詳細な紹介が以下のサイトにあります。

ダイレクトカットイングリポート 井筒香奈江の最新LP 『Direct Cutting at King Sekiguchidai Studio』 JAS Journal 2019 Vol.59 No.6 (11月号)

[https://www.jas-audio.or.jp/jas/cms/wp-content/uploads/2019/11/201911\\_033-045.pdf](https://www.jas-audio.or.jp/jas/cms/wp-content/uploads/2019/11/201911_033-045.pdf)

また、オリオスペック主催のプロモーションイベントのYouTubeでのアーカイブ配信もあります。

<https://www.youtube.com/watch?v=BsDKtmKybtQ>

同時録音でe-onkyo配信のDSDやPCM音源も好評のようです。

<https://www.e-onkyo.com/music/album/lblp051/>

再生条件は、45回転で、次の二つの構成で再生しました。

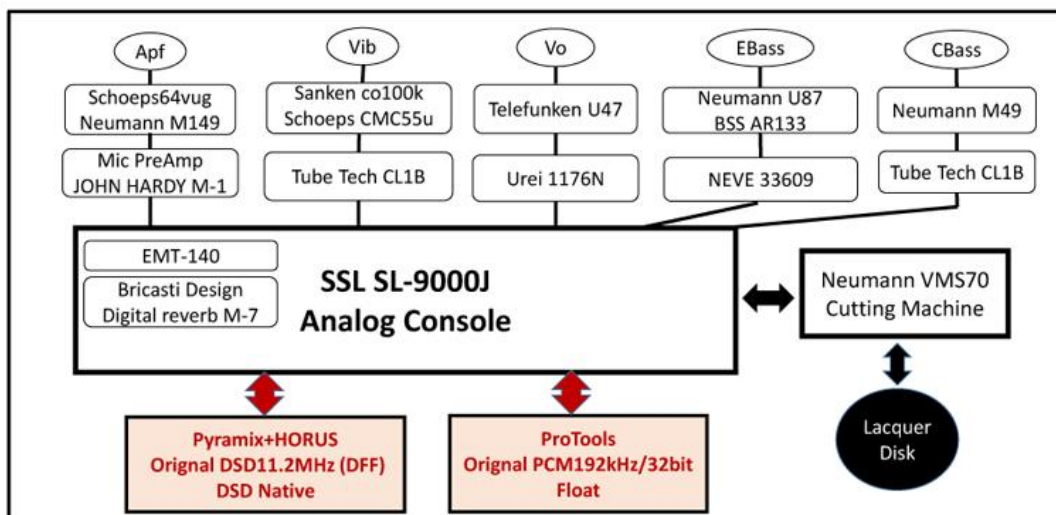
Ortofon Royal N (Garrad 401/FR-64s)→Stage 3010→

Brooklyn DAC+ (MM)入力→P&G フェーダー→300B シングル→FAL C90-EXW

My Sonic Signature Gold(LINN LP-12/GLANZ MH-9Bt)→My Sonic Stage 3010 →

Brooklyn DAC+ (MM)入力→P&G フェーダー→300B シングル→FAL C90-EXW  
 ダイレクトカッティングのフローチャートを下記に示します。

## ダイレクトカット・デジタル録音システム図



この種の音楽はあまり聴きませんので、的確な指摘はしにくいのですが、上記サイトの記載ならびに配信で語られた目標は十分に達成されているように思います。

一言で言えば、(おかしな表現ですが・・・)「アナログらしからぬアナログ」という印象です。人によっては、「アナログを超えたアナログ」と言われるかも知れません。

CDにはCDの、SACDにはSACDの、ハイレゾファイル音源にはハイレゾ音源の、そして配信音源には配信毎の音質があるように、アナログにはアナログ特有の音質があって、それが魅力になっています。そしてレーベル毎、イコライザーカーブ毎、テープやデジタルレコーダー毎、カッティングやプレス毎などによって個性があります。

本盤がダイレクトカッティングにより、そういった中間のプロセスの音への影響が軽減され、極めてニュートラルであり、それゆえ「アナログらしからぬアナログ」という表現をしてみました。製作過程が単純である故、静寂感があり、中間プロセスの音の個性が出にくいようです。特に倍音が正確に捉えられているようで、ピアノの高域が綺麗ですし、ボーカルは広がり気味に展開しますが、英語の歌詞の子音が自然です。

また、ほとんどリミッターをかけていないようで、ピアノやヴィブラフォンの音量が上がったところで、Garradのシステムでは頭が潰れます。ある意味、再生側の能力やアジマスやVTAその他の調整が試されているのかも知れません。

機器面では、アナログコンソールやマイク、リバーブの選定が巧みで、自然な音質を表現しています。ただ、1点、ヴィブラフォン(生演奏は一度だけ経験)の音の揺れと広がりがきついようですが、マイクの捉え方なのか、鉄板リバーブとの相互作用なのか、このあ

たりは不明です。しかしながら、全体として、ボーカルや個々の楽器の質感は、静寂感の中から、しっかり浮かび上がってきます。

通例、上記の二つのシステムでは、音の聴こえ方が随分違いますが、この場合、若干の差はありますが、音源自体がニュートラルであるせいか、似通った音になっています。

上記サイトの記載ならびに配信で説明のあった音の捉え方は聴いてみて理解できましたが、これらの曲の解説やアーティストがその音楽性をどう表現しようとしたか、それを助ける技術との関係にはあまり触れられていないように感じます。音質先行の職人気質の発揮やチームワークという言葉もあったようですが、それらの前提となる音楽表現のあり方との関係の説明が欲しかったと愚考します。

以上